

| | |
|-------------|----------|
| 群 教 セ | G10 - 01 |
| | 令7.290集 |
| | 道徳 |

問題意識をもち、考えを深め合う生徒の育成

——発問の組み立てと話合いの工夫を通して——

特別研修員 星野 佑樹

I 研究の概要

1 主題設定の理由

中学校学習指導要領（平成29年告示）解説特別の教科道徳編では、「ねらいを達成するには、生徒の感性や知的な興味などに訴え、生徒が問題意識をもち、主体的に考え、話し合うことができるように、ねらい、生徒の実態、教材や学習指導過程などに応じて、最も適切な指導方法を選択し、工夫して生かしていくことが必要である。」とされている。また、令和7年度群馬県学校教育の指針では、授業づくりのポイントとして、「指導の意図を明確にし、多様な考えを引き出す中心発問と考えを深める補助発問の精選」が示されている。

研究協力校の生徒は、積極的に授業に取り組む様子が見られる。挙手して意見を発表したり、発表や他者の意見に対して賞賛したりすることができる。また、発言が多くない生徒でも、教師や他の生徒の発言を聞き、ワークシートに意見を書くことができる。しかし、多くの生徒が問題意識をもって授業に取り組むことに課題が見られる。自身の経験や思考に頼って授業に取り組んでいるため、道徳的価値の深まりが不十分である。また、特定の生徒が話し過ぎることで、問題意識をもっていない生徒が問題解決をしたと思いついてしまったり、他者の意見や発言に対して深く考えずに同意したり、肯定したりしてしまう場面が見られる。そのため、自我関与まで至らず、振り返りを一般化して記述してしまう生徒が多い。

そこで、生徒の経験に基づく既存の道徳的価値とのズレを問題意識としながら授業に参加し、発問の組み立ての工夫において考えを深め、生徒全員が本音で話し合う活動を通して道徳的価値の自覚を深めてほしいと考え、本研究テーマを設定した(図1)。

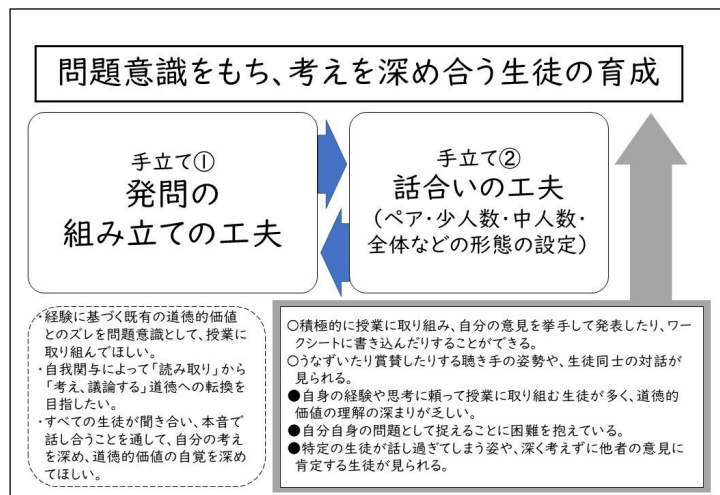


図1 研究のイメージ

2 具体的な手立て

手立て1 発問の組み立ての工夫

問題解決に向けて主体的に考え、自発的な話し合いを深めるための発問を組み立てる。具体的には、①登場人物の心情に共感、投影するための発問（以下、「発問①」）。②登場人物の言動を分析、批判するための発問（以下、「発問②」）。③登場人物の葛藤、転換場面における発問（以下、「発問③」）。④登場人物、自己の道徳的価値を追求するための発問（以下、「発問④」）とする(図2)。

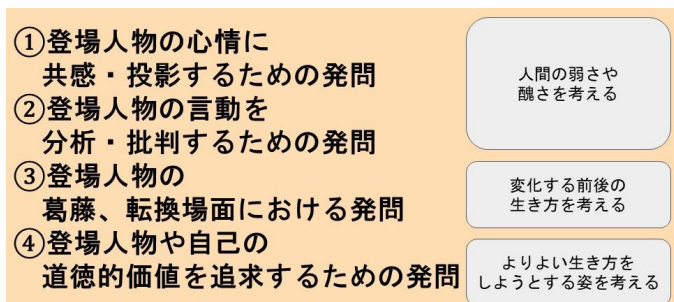


図2 発問の組み立ての工夫

手立て2 話し合いの工夫

「発問①」は、ペアで話し合う。最小単位の話合いとすることで心理的な負担を軽減する。

「発問②」は、少人数で話し合う。あえて二項対立の発問とすることで他者との対話を広げて、活発な話し合いとする。

「発問③」は、中人数で話し合う。p4c的な対話で葛藤、転換場面を多面的に考え、新たな問いを生み出したり、問題解決の糸口を見つけたりする。

「発問④」は、全体で話し合う。自己を振り返り、これからの生き方を発表することで自我関与につなげて、自分なりの納得解を見いだす。

II 実践例

- 1 主題名 調和のある生活を送るために 内容項目 A - (2) 節度・節制(第1学年・2学期)
教材名 「よごれた教科書」(出典:「新しい道徳 1年」東京書籍)

2 授業の実際

本主題は、A-(2)「節度・節制」に基づき、「望ましい生活習慣を身に付け、心身の健康の増進を図り、節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活をする事」に関する内容項目である。

指導に当たっては、節度・節制の大切さについての理解を一層深め、望ましい生活習慣を身に付けることの大切さについて考えさせることで、調和のある生活を実現しようとする道徳的実践意欲と態度を育てることが求められる。

本学級の生徒は、自分の可能性を追求し、前向きな気持ちであらゆることに取り組んでいこうとする意欲を高めることができている。また、人間的な弱さを理解し、弱さを乗り越え、自らの意思や判断で責任ある行動をしようとする大切さに気付く生徒も少なくない。しかし、まだ精神的な幼さを残しているため、自己の欲望や衝動のままに行動してしまうこともある。また、交友関係や行動の範囲が大きく広がったことで生活のリズムを崩したり、不摂生な生活を送ったりしている生徒も多い。そこで、本授業を通して節度を守り節制に心掛け、安全で調和のある生活の実現に努めることが、自分自身の将来を豊かにするものであることを自覚できるようにする。

導入で、事前アンケートの回答から、既存の道徳的価値とのズレを問題意識とした。「あなたが頑張りたいことはなんですか」では、テキストマイニングを活用したところ、部活動や勉強といった回答が多く見られた。「1日の過ごし方を振り返ろう」では、インターネットやゲームをして過ごす生徒が多く見られたにもかかわらず、「生活を振り返って改善したいところはありますか」では、約9割の生徒が「インターネットやゲームをして過ごす今の生活を改善したい」と回答した。そこで、「生活を改善したくても、難しいのはなぜだろうか」と発問したところ、「少しくらいならいいかなと思うから」「好きなことを優先したいから」「家でルールが決められていないし、インターネットやゲームをしているとすぐに時間が過ぎてしまうから」などの発言があった。生徒の発言を傾聴し、問題解決のために「どうすれば正しい生活習慣を身に付けることができるだろうか」というめあてを設定した。その後、考えを深め合う生徒の育成を以下の二つの手立てによって目指した。

(1) 手立て1について

生徒が問題解決に向けて主体的に考えることができるように、四つの発問を組み立てた。

まず、「発問①」の具体で「学校が臨時休校になった時、サトシはどういう気持ちだったのだろうか」と発問した。生徒は挙手をして「勉強をしなくてよくなったから最高だと思った」「友人と遊ぶ時間が増えることでうれしくなった」と答えた。教材の文中の言葉やセリフを引用して発言する生徒に、周りの生徒もうなずいている姿があった。その後、「あなたが同じ状況になったらどう思うか」と発問し、ペアの対話を指示した。「発問①」は、考えやすい発問、対話しやすい発問となるように意識した。

次に、「発問②」の具体で「なぜサトシは『もう1回やろう』と言ったのでしょうか」と発問した。生徒は挙手をして「友人もゲームを楽しんでいたのだから誘ったのだと思う」「楽しいことはずっとやりたいと思うから」と答えた。教材から離れ、登場人物の心情や考えを自分の言葉で発言する生徒の姿が見られた。その後、「『もう1回やろう』という発言はよいことか悪いことか」と発問し、小人数の対話を指示した。「発問②」は、ICT端末で赤、青のカードの提出を促し、二項対立を一覧に表示することで自分の意見を相手に伝えられるように意識した。

次に、「発問③」の具体で「サトシは教科書のよれよれになったページをめくりながら、どのようなことを思ったのだろうか」と発問し、中人数の対話を指示した。「発問③」は、p4c的な対話とし、コミュニティボールや思考ツールを活用することで生徒が積極的に対話に参加し、主体的に問題点を考え、新たな問いを生みだせるように意識した。

最後に、「発問④」について、対話から生まれた新たな問いを取り上げて「サトシがよごれた教科書を机の上に置いた理由を考えながら、あなたがよりよく生きる上で何を大切にしたいですか」と発問し、全体の対話を指示した。「発問④」は、生徒の対話から生まれた問いから、様々な視点や立場で考えることができるように意識した。

(2) 手立て2つについて

生徒同士で意見を聞き合ったり、本音で話し合ったりすることができるように、段階的な話し合いを設定した。

まず、「発問①」におけるペアの対話は、隣の席に座る生徒同士で行った。「学校が休校になるって幸せ」と、登場人物と同じ気持ちをもつ生徒や「私たちが小学校2年生の時に休校になって、好きなことをして過ごすことができていた」と過去を振り返る生徒がいた。その一方で、「以前の休校で学習する内容を取り戻すのが大変だったから勉強は大丈夫なのか心配になる」「家にいるだけで、外出できないし嫌だ。ゲームに誘われても困る」と登場人物と異なる心情を話す生徒も見られた(図3)。

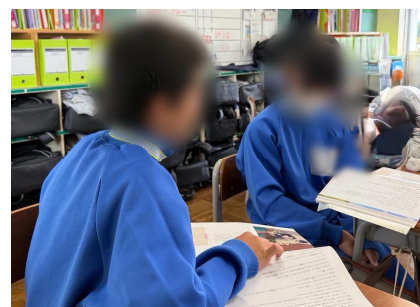


図3 ペアの対話

次に、「発問②」における小人数の話し合いは、電子黒板に映された赤と青のカードを基に、同じ意見をもつ生徒4～6人程度で行った。その後、異なる意見をもつ生徒との対話で「しなければいけないことを後回しにしていることが問題であって、友達を誘うのはよいことだと思う」「私たちがゲームやインターネットをしているときに区切りをつけられないのだからずっとやろうとは思っていないけれども、友達を誘うのはやっぱりよくないことだと思う」と問題場面を見いだして他者と議論する生徒が見られた(図4)。



図4 小人数の話し合い

次に、「発問③」における中人数の話し合いは、10人程度で行った。コミュニティボールを持った生徒が発言したり、ボールをパスして発言を促したりしながら「休校前に算数を頑張っていた過去の自分を思い出していた」「頑張ろうという気持ちを忘れてゲームばかりしている今の自分が情けない」「これからどうすればよいかと不安になった」と話し合う姿が見られた。また、登場人物の転換点についてYチャートを活用して考え、過去、現在、未来の心情に分類して発表した。登場人物の葛藤や生き方の変化を考え、自分を見つめながら「サトシの生き方や考え方のよさはどこにあるのだろう」「これまでの自分の弱さはどこにあったのだろう」



図5 中人数の話し合い

「よりよく生きることで大切なものは何だろう」といった新たな問いが生まれた(図5)。

最後に、「発問④」における全体的話し合いは、クラスで行った。発問に対して7割の生徒が挙手して「机の上に置いたのはいつでも初心を忘れずにいるためだと思う。サトシと同じように僕も過去の努力を大切にしておきたい」「ゲームばかりしていた自分を戒めるために教科書を机に置いたのだと思う。私は、自分の欲をコントロールして、節制に心がけていきたい」「教科書を飾ったのは、過去の努力の成果を見えるところに置いておきたかったのではないかと思います。僕は、正しい生活習慣のために家でルールをつくろうと思います」などと登場人物の行動を考えながら自我関与したり、納得解を見いだしたりする発言があった（図6）。



図6 クラスの話し合い

III 研究のまとめ

1 成果

- 導入における事前アンケートを用いた既有的道徳的価値とのズレを意識する発問や、「発問①」～「発問④」の組み立てにより、これまでの一般化を中心に記述する振り返りから、内省化も含めた振り返りを記述するようになった（図7）。生徒が問題意識をもって授業に取り組むことで考えが深まり、より一層道徳的価値の理解につながった。

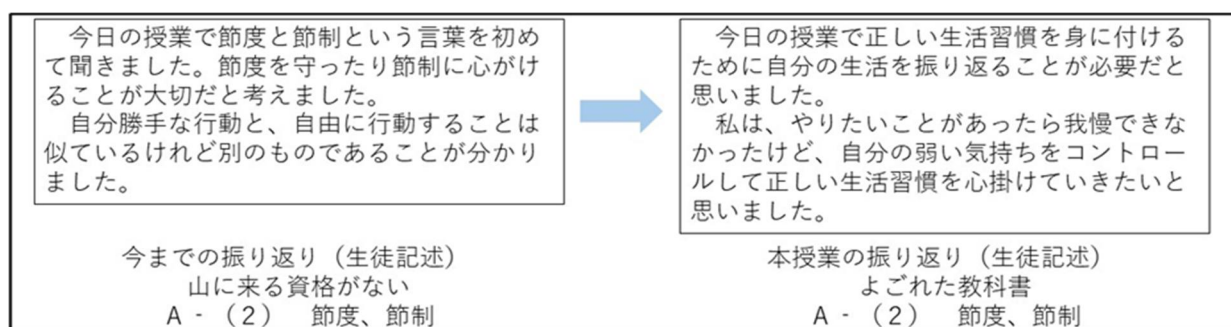


図7 生徒の振り返りの変化

- 「発問①」、「発問②」で、教材文中から心情を読み取ることから普段は話さない生徒が話す姿が見られた。また、受け入れてもらえる安心感によって教科書を読み取る答えではなく、生徒が本音で話し合う姿が見られた。横に座る生徒と対話することで正対して目を合わせるという緊張感が薄れたと振り返る生徒や、ICT端末で意見を一覧表示し、少人数で対話することで意見の共通部分や相違部分の共有ができた振り返る生徒がいた。
- 「発問③」、「発問④」で、登場人物の言動や心情について多面的に考え、話し合う姿が見られた。また、新たな問いに対する意見や自我関与を基にした、自己の生き方について話し合う姿が見られた。コミュニティボールを用いて全員が対話に参加したり、Yチャートを活用して様々な視点から物事を考えたりすることができた振り返る生徒や、これまでの発問や、段階的な対話の形式によって、挙手して発言することへの抵抗がなかった振り返る生徒がいた。

2 課題

- 事前アンケートの内容から問題意識をもつことで内容項目が限定されてしまった。他の内容項目を意図的に関わるようにするために多角的な発問や問い返しを工夫し、生徒の発言や思いを盛り込んだ授業を展開が必要である。
- 話し合いにおいて教師がファシリテーターとしての役割を担うため、複数あるグループの対話を教師が追うことができなかった。生徒のファシリテーションスキルの育成や対話を深めるための視点が必要である。